

## 情報学共同研究

### はじめに

情報研究や情報学部研究ではなく、情報学研究がわれわれ共同研究者に共通の問題関心であった。副次的には、情報研究や情報学部研究が含まれるとしても、中心的目標は「情報学」である。「情報学」を目ざすことによって「情報」や情報学部は自然に見えてくるという予感もあった。

文教大学情報学部は1980年に日本で最初の情報学部として誕生した。この学部は社会学の分野に属し、広報学科と経営情報学科という両学科を持つことによって、社会科学系と自然科学系の全く異質な研究領域の教員たちが、同一学部内で議論を交わすことをもたらした。この情報学部という組織は「それまで無関係であった領域を結びつけることによって、思いがけない連結を生むような創発型のネットワーク」（今井 賢一『情報ネットワーク社会』）といえる。この人的条件を情報学共同研究の第一の動機とすれば、第二の動機は1980年以後の社会にきわめて急速な「情報」に対する学問的関心の拡大である。「情報」を冠する大学、学部、学科の構想は国公立・私立を問わず「流行」の観を呈し、「諸科学はすべてますます一つの基礎概念、すなわち情報という基礎概念のまわりを旋回するようになっている」（ジャック・アタリ『情報とエネルギーの人間科学』平田・斉藤訳）とさえいわれる。

昭和62年度を初年度とするわれわれの共同研究は、各自の専門研究領域にとって「情報」とは何か、その機能と意味の報告から始まった。最初に見出されたのは、各人の科学認識と研究方法の、予想をはかるに越える差異であった。

既成の専門領域に情報概念を利用・応用する情報研究もあろうが、情報学研究は情報それ自体を包括的かつ継続的に取り上げることを要請する。このことはまた、新しい研究方法の創出を要求するものでもある。

各種の世俗的事情もあり、共同研究は緒についたばかりであるが、初年度の研究成果は以下の四人の個別論文として発表することとなった。その際、異質分野の研究者の相互理解を考慮して、記述レベルの平明さを心がけた。当研究は第二年度へと連続しており、メンバーも拡充して討議を重ね、さらに研究を発展させる予定である。

1988年 9月

情報学研究会

原野 秀永  
岸田 功  
鈴木 昇一  
横田 貢

〈注〉横田論文は縦書きのため、巻末から掲載した。

# **Informatics Studies**

## **Preface**

“All sciences have been circling over a basic concept: Information.” (Jacques Attali, 1979)

We, natural scientists, cultural scientists, and social scientists, have met to discuss “informatics” several times. Based on these exchanges, we wrote the four papers that follow.

It is our belief that “informatics” studies are neither information studies nor the studies of information faculties at universities.

Together with others, we will pursue our studies for an additional year.

### **Society for Informatics Studies**

Hidenaga HARANO

Isao KISHIDA

Shoichi SUZUKI

Mitsugu YOKOTA